浄土宗西山禅林寺派
潮音寺だより
第313号
平成21年11月
電話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
choonji@aichi.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/　ナモの寺 検索
〒456-0034　名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

掬水月在手

【出典】『全唐詩』于良史「春山夜月」の一節。「水を掬すれば月は手に在り」と読む。「弄花香満衣（花を弄すれば香は衣に満つ）」と続き対句をなす。

お月様
お月様
皓々とひかり輝く
お月様

お空に高く
お月様

どうすりゃ届く
お月様

なぁに
水を掬えば
手の中に

お月様
お月様
今幾つ

まだ年ゃ若い
十三、七つ

掬水月在手

今年の十五夜は、十月三日でありました。とても良い天気で、すばらしい名月を堪能させていただきました。十月三十日の十三夜はどうでありましょうか。

澄んだ秋の空に皓々と冴え渡る名月を、法然上人は「**月影のいたらぬ里はなけれども眺むる人の心にぞ澄む**」と歌われ、**仏の慈悲**、あるいは、それに気づくことにより得られる**安心**、禅的にみれば**悟り**に譬えておられます。

月は、太陽と比べて、その静かで澄み切った輝きを放つところから、「**涅槃寂静**」につながるとして、仏教ではたびたびその到達目標の悟りの譬えとして登場します。表題にあげました「掬水月在手（水を掬すれば月は手に在り）」も、そんな禅語として墨跡に認められることの多い句ですので、目にされた方も多いのではないでしょうか。旅館とか茶室などに「掬水亭」「掬水庵」とあったりするのは、この語に由来します。

出典は『全唐詩』于良史「春山夜月」の一節で、「弄花香満衣（花を弄すれば香は衣に満つ）」と続き対句になっています。ですから、本来は春の詩であり、「月と自分、花と自分は、それぞれ別々のものでありながら、それが一体となったとき、主客不二・物我一如、三昧・無我の境地となる」と解釈できましょうか。

しかしここは、元が仏典ではない訳ですし、別個に、「掬水月在手」は秋の句、「弄花香満衣」は春の句として味わったほうが、より禅味が出るように思います。

前句は、「悟り（安心）は、決して手の届かないところにあるものではなく、獲得しようとする心（菩提心）こそが大切である」、もしくは「仏性は、誰にでも備わっているものである」とも、浄土教的に見れば、『観無量寿経』の「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」、前述の法然上人の「月影の」の歌と同義であると考えることが出来ます。このような解釈は、春の朧月夜からは、出てこないでしょう。

一方後句は、「花の香りを良い教え、仏法と捉え、良い教え、高徳な人と触れ合うことにより、知らず知らずのうちにその影響を受け、香りを放つようになる」ということになりましょうか。

ところで、禅画としてよく描かれるテーマの一つに「指月布袋図」があります。文字どおり、布袋様

が月を指差（ゆびさ）している図であります。禅においては、真理（月）を悟るために、指（経文）で月を差しますが、月を見た後(真理を悟った後）には「指を切れ！」、つまり、月を差した指は無用と考え、言わば「指切られ役」として、観音様ではなく布袋様を登場させている図ではないかと私は思います。

出光美術館所蔵

そんな中、斬新で奇抜な禅画を多数残しておられ、人気の高い仙厓（せんがい）和尚（一七五〇～一八三七）の『指月布袋』は、とてもユニークです。まず、肝心の月が描いてありません。子供がいます。賛（さん）には「ヲ月様幾ツ十三七ツ」と書いてあります。何を意味しているのでしょうか。

お月さまいくつ　十三七つ
まだ年ゃ若いな　あの子を産んで
この子を産んで　だれに抱かしょ
お万に抱かしょ　お万はどこいった
油買い茶買いに　油屋の前で
すべってころんで　油一升こぼした
その油どうした　太郎どんの犬と
次郎どんの犬が　みんななめてしまった
その犬どうした　太鼓にはって
つづみにはって
あっちへ行っちゃ　ドンドコドン
こっちへ行っちゃ　ポンポコポン

【参考】日本子守唄協会（南魚沼郡塩沢町）

『お月様いくつ』は、古くからほぼ全国的に広く歌われてきた童歌（わらべうた）とのことです。ただ、色々なバリエーションがあり、しかも、『かごめかごめ』と同様、意味があまり分かっておりません。

子供（凡夫（ぼんぷ））は、色々な疑問を持ち、大人（布袋（ほてい））に色々なことを聞いてきます。「お月様いくつ？」「十三七つ」。そんな馬鹿な話はありません。しかし、大人(布袋）だって月（真理）のことなんて分からない（月が描いてないのはそのため）訳で、子供（凡夫）が納得すればそれでよいのです。別に、騙（だま）す訳ではなく、子供（凡夫）をスヤスヤ寝かしつけること、安心させること、それが大人（布袋）の役目なのです。

仏教における月について、私なりの意味づけをさせていただきました。どうぞ、ご自身は、ご自分で月を掬（すく）ってみて下さいませ。

◎燈籠

今でこそ、日本庭園のアクセサリーと化した感がある「燈籠」だが、もともとは修行僧が用いた日用品。

かつてインドの僧侶たちは、夜、裸火のもとで読経に励んだ。ところがこれでは火災の危険がある。さらには、ある修行僧が燈火をつけてお経を唱えているとき、虫がこの炎に入って死んでしまうというアクシデントが起きた（虫一匹殺しただけでも大事件なのだ！）。そこで、火災予防と虫を殺さないようにするため、銅、鉄、瓦、木、竹で燈籠を作ることが許される。

しかし問題は、そこに張るもの。〝薄氈で遮障すべし〟とされていたが、それが手に入らなければ雲母の辺、あるいは紙、絹を用いよとされていた。

つまりは、あくまで燈籠は実用のためだったのである。それが日本に伝わってからは、仏殿の前に置かれたり、堂内に安置されたり（「台燈籠」）、寺院や神社の軒下に吊り下げられるようになった（「釣燈籠」）。そして現在では、本来の虫を殺してはならない、という役目も忘れ、集蛾灯を兼ねた庭飾りとして置かれるケースも少なくない。（『仏教のことば』早わかり事典）

雑記

▼寄進者名簿

多くの方々からご寄付を賜りましたので、罄子（30万円）も併せて調達することにしました。本当にありがとうございました。

◎江崎恒美・直美（二万円）
◎酒井栄市
◎荒谷政義
◎三井繁男
◎菊田光
◎江口和子
◎井筒順子
◎小島卓司
◎上野進
◎村瀬たね
◎江崎君子
◎水野武彦
◎市野義和（先回誤植再掲陳謝）（以上一万円）
◎東金悦子
◎東美津子
（以上五千円）
◎加藤久義（三千円）
順不同 敬称略
◎熊澤田鶴子
◎岩田志津子
◎鈴木鉦三
◎塩津和夫
◎伊藤尚和
◎荒谷文雄
◎吉戸照秋
◎菊田重夫
◎江嵜エツ子
◎橋下賢嗣
◎村田實

▼十三夜

陰暦九月十三日の月の季題は後の月。十三夜、豆名月、栗名月とも。

◆風呂上がり下駄履き見入る

十三夜　沐魚